

パル・ヴァンナリーレア著、岡田知子訳
『カンボジア 花のゆくえ』

段々社

本書は、カンボジアの女性作家パル・ヴァンナリーレア氏（一九五四年生まれ）が一九八八年に発表した長編小説である。カンボジア現代文学の長編小説として初めての邦訳になる。

この小説は14の見出しで構成されており、物語はポル・ポト時代終焉数カ月後の一九七九年五月から一九八一年あたりまでを現在時点に進行するが、見出し中の「2資産家の娘」から「9 黒い世の終わり」までの部分は女性主人公による過去回想の形で描かれ、時間の長さは一九七五年のロン・ノル政権末期から一九七九年一月のポル・ポト政権崩壊までの四年間に及ぶ。この回想が物語全体の約六割を占める。

この小説の原題は「闇は去った」である。邦訳タイトルとの相互関係を気にしつつ、読者はこの小説を読みすすめることになる。原題にある「闇」とは当然、ポル・ポトの暗黒統治をさすものと思いつく。読みすすめると、途中で、必ずしもそうではないことに気づかされる。ポル・ポトも「闇」であることにちがいはないが、この「闇」はむしろ女性主人公の心の「闇」なのである。

この小説には、主な登場人物が九名登場する。物語は、女性主人公ミアルダイと青年ボライを中心に展開する。

物語は、ボライの故郷の家の様子から始まる。ボライの家にはミアルダイが身を寄せ、彼の母親の仕事の手伝いをしていた。家を留守にしていたボライはブノンペンからもどると、祖国のために入隊の決意をしたことを告げる。ボライの希望で一家はブノンペンに移り住むことになる。ミアルダイは三年あまり遠ざかっていた生まれ故郷ブノンペンにもどることに言い知れぬ感慨を覚える。「彼女の思いは、少女時代の苦々しい思い出へととんだ。」(61)

以下に、上に述べた見出し2から9にいたるミアルダイの長い長い過去回想を要約してみよう。

「ミアルダイ（十六歳ぐらいのすらりとした娘）は小さい時に母親を亡くし、教育者で資産家の父親ソコンに育てられた。ソコンは仕事に追われ、ミアルダイの教育にまで手が回らず、そのせいかミアルダイは勝ち気なお転婆娘に育つ。ソコンはある日、暴漢に襲われた時、一人の大学生によって難を救われる。その青年が旧友の息子ボライであることがわかり、ソコンはその苦学生を家に同居させる。ミアルダイはボライを見下し、威圧的な態度を取る。ボライは十三歳の時に、地方裁判所の裁判長をしていた父親を不幸な事件で失い、母親が故郷で貧しい生活を送っていた。また、故郷には彼が結婚したいと願う恋人チャンナーがいた。

ミアルダイの父には税関の高官をする兄がいた。その兄夫婦にはしつかり者の長男と派手好みの次男という性格の対照的な二人の息子がいた。しかし、その兄は長男の結婚後ほどなく世を去っていた。一九七五年にはポル・ポトの解放軍が攻勢を強めていた。四月、ついにロン・ノル政権のブノンペンは陥落し、以後四年近くにおよぶポル・ポトの暗黒時代が始まる。ブノンペンの住民は労働力として、「新人民」のレッテルのもと地方に強制連行される。

プノンペンを追われたソコン親子、ボライたちにも地方での強制労働が待っていた。救命策として、ソコンはボライとミアルダイを夫婦として登録させる。ミアルダイは苛酷な労働に耐えられず、重病を患う。さらには彼女は、仲間を庇おうとした父が口答えを理由にオンカーの手によって殺されたことを知らされ、不幸の淵に沈む。医薬品もなく、死を待つばかりの彼女は時計と引き替えに女医師からもらった薬で一命を取り留め、回復に向かう。ポール・ポト政権はやがて、ベトナム軍に支援された救国民族統一戦線によって崩壊に追い込まれる。それは一九七九年一月のことである。

ミアルダイ、ボライたちはこうして闇から解放される。しかし、ミアルダイは父親の死という闇に心を覆われる。また、彼女はボライに対する以前の威圧的な態度を恥じ、自分の生き方が闇に覆われていたことを悟る。形ばかりの夫婦ではあったが、彼女はボライ親子の故郷の家に身を寄せる。」

以上の内容である。続いて物語は、「10 出発」を迎え、「14 暗雲は晴れて」で完結に至る。

「ミアルダイはプノンペンで勉学に励む。ボライは入隊して前線に出る。彼女はある時偶然、義理の伯母（父の義姉）に再会するが、長男夫婦がポール・ポト時代に犠牲になったことを知らされる。その伯母はミルアダイを引き取るうとして、相談のためボライの母親を訪れる。そんな時、ボライが行方知れずになっていた恋人チャンナーを伴って現れる。彼女はポール・ポト政権下、強制結婚させられ、一児の母になっていた。夫はオンカーによって殺された。ボライはチャンナーの子の父親になる決意をした、とミルアダイに打ち明ける。しかし、これはミルアダイの気持ちを試そうとしてボライが仕組んだ芝居であった。チャンナーの夫は殺されてはいなかった。試さ

れているとは知らないミアルダイはボライへの思いを断たれ、落胆する。彼女はボライの家を出て、義理の伯母の家に身を寄せる。彼女は伯母が次男ともども骨董品の密輸一味に加わり、不正な金儲けをしていることを知る。部隊からもあり、副検事になっていたボライは密輸一味を追いかけていた。社会悪を嫌悪するミアルダイは、ボライに相談しようとするが不在であった。検事長の提案に従って、ミアルダイは密かに伯母たち密輸一味の様子を窺っていた。ミルアダイの協力により伯母たちは逮捕される。

ボライは、ミルアダイの気持ちを試すためにチャンナーに頼んで、芝居を仕組んだことを彼女に打ち明け、結婚を求める。ボライはミルアダイの愛を確認する。時に、ミアルダイは奨学金を得て、五年間の留学に出かけることになり、ボライは可能性を高めようとする彼女を支援する。」

物語の粗筋は以上のようなになる。「ミアルダイ」とはカンボジア語で「くちなし（の花）」を意味することが後半でわかる。邦訳名「カンボジア花のゆくえ」の「花」に結びつく。ミアルダイの心を暗雲のごとく覆っていた「闇」は消え、ミアルダイの花は可憐な姿を取り戻す。物語の時代背景に関しては、巻末の「訳者あとがき」に詳しく述べられており、大変参考になる。

この小説の発表された一九八八年のカンボジアは、ベトナム寄りのヘン・サムリン政権下にあった。「表現の自由というものはなく、厳しい検閲を通過した作品だけが国営の印刷所で印刷された。」(p.198)との記述が見える。そのヘン・サムリン政権も消え、一九九三年には、総選挙を経てカンボジア王国になり、現在に至っている。文学状況も一九八八年当時とは様変わりしているようである。本書の評価については、訳者が適切な言葉で述べられている。

「本書『カンボジア花のゆくえ』も例外ではなく、政治的スローガンや語彙がちりばめられ、愛国心に満ち溢れた登場人物たちは、反政府、反社会主義的な「敵」を憎悪し、国家建設・防衛の任務に忠実である。だが主人公ミアルダイが過去を振り返るという場面を設定することによって、それらお決まりのパターンを一切入れない一九七〇年代前半の描写に物語の約三分の一を費やし、当時の若者の風俗を取り入れて彩りを添え、作品が完全に政治的プロパガンダの道具とはならず読者の興味をひくよう工夫されている。」(p.199)

この小説を読んでいて私は、歴史と虚構ということについて考えた。歴史の重みを小説(フィクション)は、どのように、どれだけ虚構化できるか。文学作品として、どのように、どれだけ読者を感じさせることができるか。フィクションはノン・フィクションとは異なる機能をもち、効果を及ぼすからである。カンボジアの文学者にもこれは課題のひとつであると思う。

本書訳文は丁寧でこなれた文章になっており、訳者の語学力と文章力を窺わせる。訳者は本書に先立ち、『現代カンボジア短編集』(大同生命国際文化基金、二〇〇一年)を刊行されている。カンボジアの文学作品を安心して日本語で読むことができるのは、それにふさわしい訳者のような方があつてのこと、今後の翻訳紹介のお仕事に期待を寄せたい。

著者のパル・ヴァンナリーレアク氏には、シハヌーク国王文学賞受賞作の長編『忘れ得ず』など、他にも優れた作品があるようで、興味が引かれる。また、氏は小説家としてばかりでなく、シナリオライター、作詞家としても活躍されている。

なお、パル・ヴァンナリーレアク氏は独立行政法人国際交流基金

アジアセンターの招聘により、本書刊行間もない昨年十一月以来日、講演されている。同アジアセンターの企画「開高健記念アジア作家講演会シリーズ」はこれで十三回目を迎えた。

(川口健一)